「六十路」　　（２００３）

４０年間の会社生活が終わった、元々会社人間とは程遠く、会社でも自分中心人間で通してきた事もあり、定年は本当に嬉しかった、定年後も好条件での再就職先も紹介されたが見向きもしなかった。一日でも早く自由人になりたかった。とにかく待ち遠しくて、正式退社の日の一カ月位前から年休消化で単身赴任していた寮に居座っていた、自宅は賃貸中なので明け渡し迄の間、年休とはいえ退社までは社員として堂々と寮に居る権利はある。皆が会社に行くのを静かに見守り、寮の朝夕の美味しい食事を頂き、夕方４時ごろから大浴場に一人で入った。その後自宅が開け渡され、東京にいる妻が帰ってくるまでの２カ月間を久し振りの自宅で唯一人、これからの新マイ人生の拠点作りに費やした。この間、一日一日が全くの自分の時間という、夢のような日々を過ごしていた。ちょうど夏休みを迎える小学生が夏休みの計画表を作るときのあの高揚感だ。

久しぶりの自宅生活・・・３２歳の時建てた我が家も３０年を経てあちこち痛み、何よりも庭が荒れ放題になっていた。改めて五ヶ年計画で、庭の再生をやってみようと決断した。３０年を経た樹木は家を暗くする程生い茂っており、チェーンソーを使い、ナタを振り回し木を切った。植え込みは草が蔓延っていたのを使い慣れない鍬で掘り返し、畑地・花壇をまず確保した。家を建てた時に植えた木々・・はそれなりに風格を

見せてくれている。花を植え、苗を植え、挿し木・球根・種の収穫・植え付け・・・5年間の試行錯誤でやっと庭作りのサイクルを頭に入れた。庭の再生5ヶ年計画も終わった。

忙しい会社生活の時、定年になったら春は桜の花を南から北へ、秋の紅葉を北から南へ追っかける旅をしようと思っていたが、何の事はない、我が家の庭に植えた桜、桃、梅、木蓮等の花々が春になると風格ある花を付けてくれ、秋には銀杏、欅、錦木、楓が黄金色・真紅の紅葉を見せてくれる。

妻との退職記念旅行を計画し前金まで支払っていたところ、父が突然脳梗塞で倒れ、大金を揃えて旅行はキャンセルした。今は実家に行ったり来たりの毎日である。

退職

秋一日　退職式の賑やかし

退職し　初日迎える同じ場所

退職の我を訪う人　秋簾

肩書きは無し湯豆腐を突くのみ

今日一日訪う人の無き冬の雨

職を辞し樵の日々の暮れ易し

今日よりは無名となりて春の街
偏屋で笑顔もありて年を越す

初日

街の灯の　残るしじまに初日見る
志幾つも残し松納め
憎しみも赦しもありて初日見る
暗雲を裂いて今年の初日かな
赦す事ばかりの六十路初明り
煙あり灯もありぬ初明り
願い事今年も小さき初詣
善人の笑顔麗し初詣

少年の日

自分史の良きページ見て冬温し
海恋し吾は泳げず流れ星
水の星泳げぬ男　星になる
星になる俺あと何億年待てば
春昼(しゅんちゅう)や人避けること重なりぬ
我が祖(おや)は武人にあらじ熟柿(じゅくし)吸う

もう一度少年の日よ秋の水
夏花火我が背骨を貫きて
凍て星に無学の我の身を曝す
青嵐　我はも行かむ　惑い無し
春愁や我が遺伝子の一億年
己がじし生きてし今よ聖五月
万緑の勢い　我も晩学す
炎天下　銃無し剣無し生きてきし
絵描きでも詩人でも無し冬果てる

六十路

六十路なお性善説の春仕度
赦す事ばかりの六十路初明り
薫風に六十路の歩む青春譜
炎天やいくさも無くて六十路過ぐ
鰯雲　別れのばかりの六十路かな
春昼や人避けること重なりぬ
忘れたき事ありうだる夏の雨
秋黴雨病む人の話ばかりなり
気がかりの文　書き終へば雪催い

芝生の鳥たちと遊ぶ

青芝を雀啄(すずめつい)ばみ飛び跳ねる
色鳥を群れ遊ばせて動かれず

色鳥の憩(いこ)う芝庭ガラス越し
芝の中　蚯蚓(みみず)横たひ雀来る
色鳥のまことおのこの哀(かな)しさよ

枯れ芝の温(ぬく)き場所なり鳥遊ぶ
首傾(かし)ぐ考える鳥一羽おり

青芝の勢い　雀(すずめ)群れ来たる

色鳥と遊び小庭の椅子にいる

鳥と遊ぶ仕草赦さる年となり

色鳥の小庭に遊ぶ真昼時

立ちすくみ　芝生に群れる鳥を見る

春告げ鳥言葉足らずの朝なりや

頬白(ほおじろ)の真昼の奇声野遊びす

枯れ芝に来て頭掻く尉鶺(じょうびたき)

囀(さえず)りに声定まらぬ初音あり